
一人二役の魔法技師

カラシニコフ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

一人二役の魔法技師

【Nコード】

N7390Y

【作者名】

カラシニコフ

【あらすじ】

魔法と科学が混在する世界で自ら犯した罪を自ら背負いながら聞
きている。

一人の天才魔法技師のお話。

ことの成り立ち

魔法と科学が当たり前のように共存するようになってまだ日は新しい。

魔法と科学が共存するために世界は実に三度もの世界大戦が必要だった。第一次、第二次、第三次、の統合戦争を経てようやく人類は流した血の重さに気付き両者の完全統合という平和をもって使者への鎮魂とした。

しかし、表面上での戦いは終了したものの未だに世界各地で双方の過激派残党たちが散発的なテロ活動が続いていた。そこで統合政府はそれらの鎮圧、テロの抑止のため双方の権力から完全に逸脱した政府直轄の独立部隊の結成を決定。

それらの人員養成を開始、統合戦争でも完全中立を保っていた日本に養成学校を設立、世界中から人員を募ったのであった。

馬鹿が二人で悪巧み

「なんでお前が59位で俺が60位なんだよ」

「ん、普通に実力差だろバカと言いたいとこだけど最下位とその手前を争ってる時点で普通に悲しいのは俺だけか？」

養成校の定期テスト1回目は五月中旬にある、そしてテスト返却はその三日後だ。地球温暖化の影響でそろそろ春が終わるよという時期に屋上でバカ二人が騒いでいた。

もちろんその内容はつい十五分ほど前に返却された中間テストの結果によるものである。クラス順位60位までのうち59位と60位がそこにはいた。ちなみに校内順位は2567人中2567位と2566位であるまさに「ぶっちぎり」だ。

「で、どうするよ竜一このままじゃ成績不振でこの学校から追い出されちまうぞ」

「綾斗よ、その可能性を今必死で頭の中から削除しようとしてんのになぜ蒸し返す？やっぱりお前はアホなのか？アホなんだな！！」

「まずは、落ち着け。現実逃避しても何も変わらんぞ。その2に俺はアホだがお前に言われたくはない。テストの成績だって1点しかかわらねえ」

「その1点が勝負を決めることもある！」

「それは、ボーダーラインにいる人間のことだろうが、俺たちはその線かかってないねえ」

そこまで言い争ったときお互いの議論の不毛さに気付き二人ともため息をつく。そして同時にこう切り出した。

「で、結局どうする?」「」

つまるどころそうなのだ。定期テストの成績が悪くてこのままじゃ退学になる、補習という手もあるがそんなことで挽回できる点数ではない。だがそこまで考えたところで俺は一つの名案を思いついた。というよりかなり絶望的だがこれしかない案をどうやら綾斗も同じ考えに行き着いたらしい。

ニヤリという形容が似合いそうな笑みを浮かべ綾斗はこう呟いた。

「校長の正体を暴く! それしかねえ」

校長の決意

「やっぱりそれしかないか？」

「ああ、これしかない」

そういつて綾斗は立ち上がり、屋上の出口に向かう。

「どこに行く？」

「決まっている。普通校長に会うには校長室だろ。じゃあ先行つて
るからな」

一人だけ残された屋上で竜一はあの奇想天外な校長の今となっては、
伝説的な演説を思い出していた。

四月七日。残念ながら桜は散ってしまったがすべては自分の思惑道
理である。

第三次統合戦争を受けて科学サイドからも魔術サイドからも離れた。
統合政府直轄の特殊部隊設立のめどはたった。

残念ながら既存部隊からの人員引き抜きが許可されなかったため人
材の育成を初めから行う羽目になったがそれも誤差の修正範囲であ
ろう。

自分のコネクションを使い世界中から将来有望な若者を半ば強制的
にかき集めた。

すべては第四次統合戦争防ぐためである。そうしばらくしないうち
に現行の統合政府は骨抜きにされ再び戦争がおこることなどはこの
僕には、よくわかっていた。だから統合政府を揺さぶりせめて、独
自で抑止力となる戦力を確保する必要があった。

だからこうして僕は校長になった。すべては来たるべき戦乱を避

けるためあの愚かな戦いを再び起こさぬように。

さあ、そろそろ行かねば将来有望な若者たちが待ってる。

そして僕は教壇に立ち彼らに俗にいう校長先生のお話を開始した。

校長の演説

かなり広い講堂の中で約2600人の生徒が静まり返る中壇上に立つ一人の男がしゃべり始めた。

「君たちにとつてははじめましてってばいいのかな？」

うん、初めまして僕がこの学校の設立者で校長で出資者です。

ほかにも日本魔法科学混合技術開発研究所の局長とかやらせてもらってます。

名前は今は、そうですね今はまだ伏せておきましょう。

なお僕に関する情報プロテクトは完璧なので調べても何もできませんよ。

もちろん、この姿もイリリュージョンとかその他もろもろの魔法によつて身長、体重、声、雰囲気すべて変えています。

まあそんなことは置いておいてみなさんご入学おめでとごうございます。

この学校に入学した皆さんがこれからの世界をいずれ動かしていくのは間違いないと思います。

そんな人材を集めましたから。

奇人、変人、馬鹿、鬼才、天才。一般的観点から見れば螺子が1本2本どころか5本6本抜けているようなそんな奴らばかりです。

君たちが入学したこの学校もいずれは必ず歴史に残るようなものとなるでしょう。では、これからこの学校の校則を発表します。

聞いてください。

1つ、この学校には先生がいないので後で私が発表する生徒に先生を受け持つてもらいます。断ると退学です、なお成績についてもその生徒に一任します。ちなみにこの学校に留年制度はありませんWと退学です。

1つ、この学校の最大権力組織は生徒会とします。生徒会には教師

の否認権があります。

まあ、こんなところでしょうか。後は生徒手帳見ててください。最後に校長から生徒全員共通の宿題を出します。

実のことを言うと私は皆さんと同じ17歳なんです。

つまり、これから三年間皆さんと一緒に学び舎を同じくさせていただきます。

だから生徒皆さんに3年間で僕の正体を見破ってもらいます。

僕のことを見つけた時点でこの学校の卒業資格を与えるものとしません。

それでは皆さん頑張ってください。

おっと忘れてました。当校の入学試験を主席入学された1年12組の柴崎葵さんには今から二時間後までなら僕に直接対決する権利を与えますがどうしますか？」

約2600人の人間が静かに息を潜める中一人の女子生徒が静かに檀上の校長に対して啖呵を切った。

「この柴崎葵。謹んでその勝負を受けさせていただきます」

校長と学年主席との対決

養成校にはおもな建物が3つあって1つは俺たちが勉学に励む校舎、その次に学生寮。そして普段から爆音が絶えなくてこの学校で2番目に危険な体育館である。入学式に使われたのもここだ。小さい建物ならほかにもいくつかあるのだがその説明は後にする。

そう忘れてた、この学校で最も危険な場所のことを。どこの学校にでもある場所で学校内で最も広い場所運動場だ。

うちの学校のここに入ろうと思ったたらそれ相応の準備をしていくことをお勧めする。

骨が折れるくらいで済んだらまだましなほうだ。うちの学校のひまな奴らが昼夜問わず花火あげてるからな。体育館はまだ文化系の奴らが主だが運動場はバリバリ体育会系の奴らのたまり場になっているから正直命がいくつあっても足りん。

だが、そんな毎日花火が上がってるような運動場でさえ入学式当日の校長と学年主席の戦い以上の花火を打ち上げたやつはいない。

対戦直前学年主席は

私があこの学校に入ったのはもしかしたらそこにいれば彼に会えるかもしれない、そう感じたからあこの学校に入った。

私はまだ小さなころ引つ込み思案で友達のいなかった、私の唯一の友達にして私の大好きな人。

生まれた時から光を映さなかった私の左目を新しく作り直してくれただ人。でも彼はあこの戦争が始まった日。私の前からいなくなった。

私の周りにいた人たちは彼がいなくなった事に気付かなかった。

いや彼がいたこと自体忘れてしまっていたようだった。文字どおり彼は私の前から影も形も残さず消えてしまった、否初めからいないことにされた。

だけど私は忘れなかった彼がくれたこの左目が光を映し続けてくれたから。

幼い頃、確かに彼がそこにいたという証拠はもう今はこの左目の中にしか残っていない。

選手控室で模擬選の準備をしていた葵は、最近動作不良を起こすようになった左目をを保護するために眼帯をつけて長く伸ばした黒髪

を縛った。

そして動きやすいように制服から体操服に着替えながら徐々に意識を校長との対戦に向けて研ぎ澄ましていった。

難しい戦いになることは理解していたがそれは勝てないという意味ではなくむしろどうやって殺さない程度に手加減するというものがある。葵は生まれてこの方16年。今までに1度しか負けたことがなかった。

「どうしたらいいかな。うーん、殺してしまうといろいろまずいし、何より彼の居場所調べてもらえなくなる」

そう思案する中で「負ける」の3文字は彼女の中に存在しなかった。

対戦直前校長は

わくわくという気持ちを忘れてどのぐらいになるだろうか。

僕自身はたいして強くないのだが自分で作った「新作」によっていつも大して苦勞せず敵を倒してきた僕には生死の狭間で生きる！というような感覚からは長らく離れてきたので今回の感覚はものすごく久しぶりに事だった。

戦闘を前に高揚する。こんなに楽しいことはない。

おっと、これじゃあ戦闘狂だな。

僕はそんなことを考えながら模擬戦の用意を進めていく、僕のノーマル装備である「服」を着込んで「腕輪」を片方用意して「本」を片手に持ったところで準備を終える。

「今日は模擬戦でこれ以上装備すると手加減ができなくなるな
。じゃ、そろそろ行くか」

大変な戦いになるなと思いつつもやはり校長の中にも「負ける」の三文字は存在しなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7390y/>

一人二役の魔法技師

2011年12月4日00時51分発行